

第 38 回土木計画学研究発表会（秋大会）：2008 年 11 月 1 日～3 日（和歌山大学）
セッション討議内容の記録

セッション名：交通行動分析（2）	
日付：11月 1日（土）曜日、セッション時間：10:45～12:15	
司会者名（所属）：山本俊行（名古屋大学）	
討 議 内 容	セッション全体： 特にセッション全体として討議を行っていないが、これまでの交通需要予測システムにおいて現況再現性が低下する原因として、目的地選択段階のモデルの精度が低い点について指摘があった。それに対して 145 の論文では、二段階の選択プロセスと非補償型の選択行動を含む意思決定主体間の異質性を考慮することで推計精度の向上を図っている。また、144 の論文では OD 所要時間を内生的に取り扱いつつリアルタイムで交通状況を再現しており、OD 間所要時間の精度向上により目的地選択段階の精度向上も可能となる。さらに、143 の論文では PP 調査によって詳細な出発地・目的地を把握しており、今回の分析では交通手段選択段階に適用しているものの、目的地選択段階への適用も有用であろう。これら様々な取り組みにより、ダミー変数等に頼ることなく目的地選択段階の現況再現性を向上させることで交通需要予測システム全体の精度向上を進める必要がある。
	（発表番号）発表者名（所属）：(143) 牛尾龍太郎（愛媛大学） PT データによる推定結果と PP データによる推定結果が異なることについて、セントロイドの設定方法として出発地側は居住地分布が妥当であるが、目的地側は店舗密度など、異なる指標を用いる必要について指摘があった。また、被験者属性の相違についても指摘があり、重み付け推定を検討しているとの回答があった。
	（発表番号）発表者名（所属）：(144) 菊池輝（京都大学） 動的な交通施策の評価という目的に対して、本シミュレーションシステムがどのような特性を持つのか、という点に関する議論があった。また、モデルが複雑になると自由度が高くなり、現況再現が難しくなる一方、ダミー変数などを多用すると現況再現性は向上するものの施策感度が低下するという問題点があるため、現況再現性よりも、複雑なシステムの振る舞いを把握することで定性的な知見を得る、ということが重要ではないかとの指摘があった。
	（発表番号）発表者名（所属）：(145) 秋山孝正（関西大学） ルール数が 50 である妥当性やルール構築の際の初期値依存性などに関する質問に対して、様々なケース設定により今回の結果の検証が必要であるとの回答があった。また、合理的な解釈が全て可能ではないが、常識的に分かり難いのもルールの発見という観点から重要ではないかとの説明があった。今後の目的地選択行動の分析への示唆として、二段階の選択プロセスと非補償型の選択行動を含む意思決定主体間の異質性の考慮が重要との指摘があった。